

## 友人と違う服を着ていると、 うわさ話の対象になる

東京藝術大学大学院の博士  
審査会で副査を務めさせていた  
だきました。審査対象は、同大  
学院博士課程の清水千晶さん  
による「衣服と環境の同化」を  
テーマにした論文と、「アナザー  
トーキー・シナリー（もうひとつ  
の東京の風景）」という作品です。  
論文と作品をともに完成させ、  
かつ公開の場でプレゼンテーショ  
ンをおこなわなくてはならない  
ので、博士課程の学生さんはこの  
審査会までには相当のハードワ

で作品として成立している。ア  
パレル業界で服作りの仕事をし  
た経験もある清水さんならで  
はの力作でした。

この作品を制作するにあた  
り、清水さんは「上京した女性へ  
のアンケート」やインタビューを  
おこなっていました。彼女自身、  
驚いたそうなのですが、多くの  
女性が「地方では、個性がない  
服装の友人たちのなかで自分だ  
けが個性的な衣服を着ている  
と、それだけでうわさ話の対象

コミュニティの濃密さを感じさ  
せませんが（笑）。

とはいえ、東京では好きな服  
を着られる完全な自由がある  
のかといえば、そうでもありま  
せん。学生は、就活期間となれ  
ばほぼ全員、ヘアビンの位置まで  
同じ髪型のリクルートルックの  
型に無表情で入り込みます。企  
業側が強いわけではなく、  
「浮いてしまう」ことを恐れる  
学生が、失敗しないために個性  
を出さない型を自ら選ぶわけ  
です。ほかにもコミュニティごと  
に暗黙の同調圧力があり、それ  
に屈することを選ぶ人はどこで  
も見かけます。

ークを求められるのですね。

作品は、地方から東京に出て  
きた女性が7段階を経て環境  
と同化して自己を発見してい  
く過程を、7体の服で表現した  
もの。一枚の布がはみ出している  
少だけ違和感のある制服か  
らスタートして、形も色も葛藤  
やもどかしさを表すように変  
化し、最後はクールで洗練され  
たスタイルに落ち着いていく。そ  
の変容をただるだけで物語が  
感じられるし、二体一体がユニーク

になる。そんな窮屈な環境に閉  
塞感を感じていた」と答えてい  
ました。「好きな服を自由に着  
ても浮かない東京に居心地の良  
さを感じる」とも。

うつつすら心当たりがありま  
す。私は性格も生活も地味な  
ほうですが、時折、赤系のワンピ  
ースを着てメディアに出たりし  
ます。すると富山の知人から  
「赤い服を着た派手な人」と言  
われていたよと伝わってきます。  
本人に伝わってくるといいうのも

つまり、私服の程度の差があ  
るだけで、「周囲から浮いてしま  
う」ことを恐れるメンタリテイが  
あるかぎり、どこにしようかと閉  
塞感はついてまわるのです。逆に  
言えば、周囲と違うことを恐れ  
ない勇気をもつことが、場所を  
問わず心の自由を獲得するた  
めの最短距離になります。ちな  
みに赤は勇気や冒険性の象徴  
でもあります。私は人一倍メンタ  
ルが弱く臆病だからこそ、勇気  
が必要な場面で赤い色に背中  
を押してもらいます。同調の窮  
屈を選ぶくらいなら孤独でも自  
由を選ぶ。その状態に自分が慣  
れてしまうと、意外と周囲も優  
しくなるし、「違う」人同士なら  
ではの心強い連帯も生まれるも  
のですよ。



なかの かおり

1962年生まれ、富山市出身。株式会社Kaori Nakano代表取締役。服飾史家・エッセイストとして研究・講演・執筆をおこなうほか企業の顧問教授を務める。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。著書『紳士の名品50』（小学館）、『モードとエロスと資本』（集英社新書）ほか。監修した新刊『服を味方にすれば仕事はうまくいく』（ディスカヴァー・トゥエンティワン）が発売。